第 64 回 U-40 Club ～座談会～

開催日
2026 年 10 月 21 日

テーマ
外科医が取り組む臨床研究～外科医に研究は必要？～

司会
水野　良祐（京都大学）

Discussants
司会　他 2 名

内容
今回は上記テーマについて，手術を本分とする外科医があえて研究に取り組む意義や，研究を通じて得られるものについてディスカッションを行った．

はじめに，参加者それぞれの経歴や研究経験について自己紹介を行った後，外科医にとっての研究の意義について意見交換を行った．少ないながらも，研究経験が豊富な外科医から医学生まで幅広い立場の参加者が集まり，それぞれの視点から議論を深めることができた．
議論の一つとして，研究のために大学院へ進学することの意義が挙げられた．医局によっては，臨床から離れ，4～6 年間にわたり研究に専念する場合もある．そのため，外科医として臨床経験を積む時間を犠牲にしてまで研究に取り組む価値がどこまであるのかを議論した．
その中では，外科医が手術を「やりっぱなし」にするのではなく，自ら行った治療の成績を客観的に追跡・評価する姿勢を身につけることや，治療法を適切に比較し，その因果関係を検討するための方法論を学ぶことは，結果として日々の手術や診療の向上にもつながるとの意見があった．一方で，十分な臨床経験がない段階で研究に取り組んだ場合，臨床上の疑問に基づいた明確なリサーチクエスチョンを設定することが難しく，得られた結果の解釈についても臨床的な実感を伴いにくいとの意見もあった．これらの議論から，「手術と研究は相補的に高め合う関係にある」という重要な見解が得られた．

一方，このような考え方は，academic surgeon として研究を継続しながらキャリアを形成

していく外科医にとっては特に重要であるものの，手術や臨床を中心にキャリアを築く多くの外科医にとって，大学院への進学や研究に多くの時間を費やすことが必ずしも必要とは限らないとの意見もあった．今後，外科医のキャリアがさらに多様化していく中では，大学院に進学して一定期間臨床を離れ，研究に専念する従来の形だけではなく，さまざまな形で臨床と研究に関わる選択肢があってもよいと考えられた．また，そのような多様性を踏まえて医局を選択できることや，それぞれの医局がキャリア形成に関する特色を示していくことも重要であるとの意見が得られた．

外科医にとって研究が必要かという問いには一つの正解があるわけではないが，今回の座談会では，さまざまな立場の参加者から意見を聞くことで議論を深めることができた．情報提供を中心とした座談会へのニーズは高い一方で，このように明確な答えのないテーマについて参加者同士で意見を交わす形式も，U-40 Club の座談会として意義のある企画であると改めて感じた．

写真

